

上林曉全集 七

筑摩書房

上林曉全集 七

昭和四十一年九月二十二日第一刷発行

著 者 上 林 曉

發行者 竹之内 静雄

發行所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話東京 〇七六五一（代表）
振替東京 四一一二三

印刷 多田印刷株式會社
製本 矢島製本株式會社

© A. Kanbayashi

上林曉全集第七卷目次

襖一重	三
弔ひ鳥	一七
古風	三
女の懸命	四
小さな蟻瀬川のほとり	六
子の消息	六
開運の願	一〇
雪安居	一三
暮夜	一四
女客	一五
素話	一七

更年期	一九
結婚の祝辭	二八
辨天町年代記	三三
約束の家	三五
母	三七
草深野	三八
道中記	三〇
故地	三七
大阪驛にて	三四
禁酒宣言	三五
少女	三七

いさかひ……………三八三

錢は神……………三九一

春寂寥……………四〇一

魔の夜……………四三五

書 誌……………四四五

小說
七

襖一重

子供達は飢えてゐる。三河キヌの子供が、襖一つ隔てた同居家族の馬鈴薯を盗まうとしたつて、今時ちつとも珍らしい話ではないであらう。廣い東京には、ざらにある話の一つにちがひない。現に私も、同じやうな話を二三、直接聞いてゐる。私の子供にしたつて、若し隣の部屋に同居人が居れば、同じ罪を犯さないとはいへないのである。しかし、いくらある話にしても、その一つ一つが、痛ましい話であることに變りはない。私が直接聞いた話といふのは、一つは、同じ作家仲間の内田君から聞いたのである。内田君の家に、戦災に遭つた左官屋の一家を同居させてゐたことは、私も知つてゐる。内田君を訪ねる度に、爺さん婆さんが居て、八疊の間のあちらの隅とこちらの隅に、薄汚れた蒲團をひつかぶつて寝てゐたものである。時にはおかみが縫物をする手ミシンの音が、カタカタと響いてゐた。戦争中警防團と一緒に働いてゐたといふだけの縁故で、さういふむさくるしい一家を同居させ、自分はその隣の部屋で悠然と執筆に餘念のなかつた内田君の胸の廣さと神經の強さに、私は豫てから感嘆の聲を放つてゐたものだが、その左官屋たちの部屋にあつたふかし芋を、内田君の一番末の子供が盗んで食べたといふのである。それも一度だけではなく、二度も三度も同じことをしたといふのである。さう言へば、この頃爺さん婆さんの姿が見えなくなつたと思つてゐたら、

それがもとで、氣拙いことになつて、左官屋の一家は内田君の家から出て行つたのださうである。

或る日、内田君の自宅で催された文學志望の青年達の會合の席上、百二十三人に餘る會衆を前に、内田君は作家の覺悟を説きながら、それを打明けたのであつた。

「私は、さういふ子供の盜癖まで小説に書きました。私は悲しかつたし、子供も可哀さうでしたが、思ひ切つて書きました。子供が大きくなつて、私の書いたものを讀む時、きつと私の氣持を判つてくれるにちがひないと思つたからなのです。」

一座はしんとして耳を傾けてゐた。心なしか、語る内田君の横顔は上氣して、耳たぶや頬が紅らんで見えた。若しかしたら、別室にゐる夫人や當の子供の耳にも入つたかも知れない。それを押して言ふ内田君の眞剣さに搏たれたものは、私一人ではなかつたであらう。しかも、さうした同居人を置いたばかりに、子供に罪を犯させたとは、内田君は言はないのである。子供の盜癖、と言ふのである。その心事の美しさはさることながら、やはり現代の混亂した世相の生んだ悲しい事實と言ふよりかはらないのであつた。

もう一つ、最近聞いた話では、或る雜誌社から私の宅へよく来る園君の子供が、やはり、同じことをやつたと言ふのである。園君は臺灣からの引揚者で、細君と子供と三人で、兄の家に同居してゐるのださうである。世帯は無論別である。園君たちは、こちらの部屋で、黄色い玉蜀黍の粉を捏ねた團子や麥粉のすゐとんばかりを、それも足らぬ勝ちに食つてゐるのに、子供がなくて夫婦二人暮しの兄たちは、向うの部屋で、いつも氣儘な料理を作つて、白い御飯をたんまり食べてゐる。それを垣間見たり見せつけられたりしてゐた園君の六つになる男の子が、或る日家人の留守の間に、隣の部屋へ押し入つて、飯櫃の飯を掴み食ひしたことが發覺したのである。折檻して言ひ聞かせたが、頑是ない子供のことで、飢しさには勝てず、次ぎには、隣の部屋の茶餉臺の上に置いてあつた食パンを、庖丁を持つて行つて、切つて食べたのである。「そんなこ

とで、兄の家にも居辛くなつてゐるんですが、出て行かうにも行き先はなし、このままでは子供が可哀さうだし、困つてゐるんですよ。」と園君は慨いたものであつた。

しかし、三河キヌの子供の場合には、同じく同居人のものを盗まうとしたのにしても、内田君の子供や園君の子供の場合とは、少し趣きが違ふやうである。言つてみれば、事情がもつと深刻なのである。と言ふのは、母子共に飢ゑて、そのため母親が子供を唆かして、同居人の馬鈴薯を盗ませようとした形跡があるからである。

三河キヌは、安男といふ十くらゐの男の子と二人暮らしの五十婆さんである。戦争中は、小さいながらも、六疊四疊半三疊、三間の家に親子水入らずで安氣に住んでゐたのだが、戦争が濟むと間もなく、家主の身寄りの龜田一家が割り込んで来て、餘儀なく同居せねばならなくなつたのである。最初話があつた時、キヌは同居を嫌つて、家主が如何に譯を話しても刎ねつけてゐた。しまひには談判にまでなつて、結局それが甲斐ないと知ると、龜田一家が荷物を運んで来る頃を見計らつて、家中に鍵をかけ、一週間許り山梨縣の親戚へ姿を晦まし、それと知らずにリヤカアを引いて來た龜田一家を立往生させたものであつた。しかし、そんな姑息な手段で埒の明くはずはなく、遂に表の間を明け渡して、キヌ達親子は、茶の間の四疊半と玄關の三疊に逼塞せねばならなくなつた。

「嫌やになつちやふわ、お洗濯したものを干さうにも干す場所はなくなるし、お野菜を作らうと思つても、庭は取上げられるし。」と、その當座、キヌはよく隣近所で滾してゐたものである。一日中陽も射さなくなつたので、冬の寒さと思ひ遣つてゐた。

それまで、あまり信心家とも見えなかつたキヌが、急に日蓮の信者になつて、子供と二人、朝に晩に佛壇に向つて、「南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經」とお題目を唱へながら、カチカチ、カチカチと拍子木を叩

きはじめたのも、その頃であつた。襖の向うの同居人に對する面當てと、釋れば釋られぬこともない仕打であつた。それともキヌは、焦立つ感情を鎮めようとしてゐたのであらうか。それかあらぬか、キヌの信心は、間もなく杜切れ勝ちとなり、二三ヶ月もすると、はたと止んでしまつた。

龜田の一家は、夫婦に、五つになる女の子の三人暮しで、六疊の間に入つて寝起きをはじめたが、玄關が塞がれてゐるので、出入りは庭廻りだつた。井戸もガスも使へないので、洗濯その他の水仕事には、近所の共同水栓へ行き、煮焚きは、縁側に七輪を置いてせねばならなかつた。表札は、紙に「龜田多吉」と書いて、玄關の柱に、遠慮さうに貼りつけてあつた。「三河キヌ」の表札は、古びた木札で、玄關の眞正面に懸つてゐたが、ぞんざいにひん曲つてゐた。

龜田の主人は、或る末端役所の會計に勤めてゐる小さな役人であつたが、夫婦二人の實家が、直ぐ近縣の農家なので、日曜日毎に、夫婦代る代る家に歸つて行つては、味噌醬油、薩摩芋馬鈴薯の類を背負つて來るから、生活は潤澤であつた。七輪を置いたあたりには、いつも醬油の一杯入つた一升瓶が立つてゐたり、薩摩芋や馬鈴薯などが、ゴロゴロ轉つてゐたりした。

三河キヌの方はと言へば、何の職もなく居食ひだから、要救護の家庭として、時々特配の物資などを受けて、辛じて生活してゐる有様であつた。亭主が生きてた時分には、下谷の方で鮎屋を出してゐたとか。亭主が腸結核で死に、次いで空襲で焼け出され、この辨天町の家に越して來た當時は、まだ徒食してゐても、毎日の買出しには事缺かぬだけの小金を持つてゐた。よく買出しに行つて、隣近所にお裾分けする氣前好さもあつた。それが、去年の三月、舊圓の封鎖と共に、忽ち窮迫に追ひ込まれてしまつたのである。瀬戸の火鉢も賣るし、鏡臺も賣るし、ラヂオも手放してしまつた。現在、隣室で龜田一家が聽いてゐるラヂオが、それである。いつも十五分ばかり進んで時を打つてゐた柱時計も、いつの間にか音を絶つてしまつた。さうし

た金で、遅配缺配を補つて、親子二人が僅かに露命を繋いでゐたのである。

或る日、龜田の家へ、田舎の人が馬を牽いてやつて來たことがあつた。龜田の主人の兄に當る人だつた。馬の背には、一杯薪が積まれてあつた。栗毛の馬は狭い庭に引入られ、龜田の細君は愛想好く迎へて、薪を下ろす手傳ひをしたりした。馬は檜の生垣に繋がれて、健康な糞を垂れてゐた。

「おお、美代坊に蟹を持つて來たんだつた。田舎のお婆ちゃんから、お土産だと言つて、頼まれたんだよ。」と笑ひながら、龜田の兄は、ポケットの中から、紙袋にくるんだ蟹を三匹取出した。

「あんら珍らしいものを戴いたわねえ。」と言ひながら、細君が差し出すバケツの中に、缺の赤い蟹が放たれた。龜田の子供の美代子は、直ぐ手を出して、蟹をいぢらうとした。

「いけません、いけません。指を持つてくと、蟹の缺で挟まれちゃつて、とつても痛いんですよ。血が出て泣いたつて、放しやしませんよ。」と細君は脅しつけてから、義兄と顔見合せ、「美代子つたら、蟹が怖いってこと知らないのよ。」と言つて笑つた。

「東京では、蟹も見ることがないだらうからね。」と、義兄はバケツの中へ踏み込んだ美代子のお河童頭を撫でながら、煙草を一服吸つたが、その時はもうおひるになつてゐた。

「ちよつくら、辨當を使はしてもらふぜ。」と言ひながら、義兄は縁に置いてあつた辨當包みを引き寄せた。「いえ、兄さん、何にもお構ひ出來ませんけれど、おみおつけなりと召し上つていただくかと思つて……」と押し止めた細君は、既に七輪に火を熾し、簡単な支度にかかつてゐるのだつた。

膳拵らへが出來たところで、義兄は辨當包みを開いた。大きな白い握飯が五つ六つだつた、「餘分につつて來たものだからねえ」と言ひながら、義兄はそれを一つづつ取つて、弟嫁と小さな姪に渡した。細君は一旦辭退したが、押しつけられて受取つた。

「これは、大した御馳走ですわ。遠慮なく戴きます。美代子ちゃん、叔父さんに、どうも有難うと、お禮を言はないの。」

すると美代子は、大きな握飯を両手に持つて、「どうもありがたう。」と、照れ臭さうに、ビョコンと頭を下げた。みんな笑つた。そして、食事が楽しげにはじまつた。

「やつぱり、田舎の御飯はおいしいですわねえ。」と細君は義兄の顔を顧み、それから、「美代子ちゃん、そんな大きなお握り、一人で食べられるの。美代子ちゃんのお顔ほどあるぢやないの。」と燥やいだりした。

總ては、三河キヌの部屋に筒抜けだつた。握飯に噛みつく音、口をたたく音、掌についた飯粒を舐める音、何もかも手に取るやうに聞えるのだつた。食事の始まる前から、母親の膝に倚つかかつて、顔を歪めたり腹をよぢらしたりしてゐた安男は、いよいよ隣で食事の始まる氣配を感じると、もう得堪へぬもののやうに、「ねえ、ねえ。」と、むづかりはじめた。朝からフスマの團子しか食つてゐないのだつた。

「ねえ、ねえつて、何なの。」とキヌは口を失らして言つた。勿論キヌにも、事情は判つてゐた。安男は、からだの重みを一層母親の膝にもたせかけながら、「ねえ、ねえ。」を言ひつづけた。

「うるさい子だねえ。ねえ、ねえと言つたつて、何のことだか判らないぢやないの。」と、キヌ自身も焦立ちながら、嘲けるやうに言つた。

「お母ちゃん、ねえ、ねえ。」

安男はじれつたさうに、赤ん坊のやうに母親のふところに手を入れ、皺んだ乳をいぢりはじめてゐた。が、その時キヌは放心したやうに、隣の部屋に氣を奪はれて、早く食事が濟んでくれればいいと、そればかりを念じてゐた。安男は如何にぐづつても手應へがないと知ると、思はず腕に力を入れて、母親の胸を押した。母親は、はずみを食つて、へたりと後へ倒れた。

「何をするの。」

我に返つて、怒氣を發したキヌは、起き上りざま、安男を突き飛ばした。安男はぶつ倒れて、聲を上げて泣きはじめた。

「ねえ、ねえ、と言ふばかりで、何が何んだか、ちつとも判りやしない。」

前齒の缺けた口をあいて、憎さげに浴せかけるキヌの顔も、やはり泣き出しさうだつた。心は、安男と同じだつた。赤く興奮して、額の横皺には汗がにじんであつた。泣いても怒つても、白い大きな握飯が手に入らずはないので、二人とも辛いのであつた。

その頃から、龜田の家では、縁側に轉がしてあつた馬鈴薯が減つて行くのに、氣が附いた。醤油を見ると、醤油も減つて行く。怪しいと睨んだので、試めしに、馬鈴薯は數を數へ、醤油は瓶に目盛りをしるしておいた。さうして檢べてみると、明かに馬鈴薯は數を減らし、醤油は目盛りを減らして行く。それ以來、龜田の家では警戒して、食べ物一切、押入の中へ匿まつておくことにしたのであつた。

ところで或る日、龜田の細君が、子供連れの買物から歸つて來て、便所脇の硝子戸をガラリと開けた。と、キヌの子供の安男が、今し、馬鈴薯を一抱へして、襖の向うへかへらうとするところだつた。

「あら、安男ちゃん。」と細君は思はず聲を出して、立ち竦んだ。現場を見附けたのである。

驚いて振りかへつた安男も、顔色を變へて、その場に立ち竦んでしまつた。行くことも返すことも出来ない。絶體絶命である。しかし突差に、安男は隣の部屋に向つて叫んだ。

「お母ちゃん、この芋、どうするの。」

「どうでも、お前の勝手にしろ。」隣の部屋からは、棄て鉢になつた母親の聲が聞えた。

安男は一瞬困つた顔をしてゐたが、そのまま芋を抱へて、自分達の部屋にかへらうとした。すると細君の

連れた子供が、泣きながら後追つかけて、「うちの芋盗つちや、嫌や、うちの芋盗つちや、嫌や。」と、安男につかまつて行つた。一方は行かうとするし、一方は行かせまいとするし、子供同士の悲しい悶着となつたのであつた。

「美代子ちゃん、美代子ちゃん。そのお芋はねえ、安男ちゃんに上げときなさい。うちにはまだ澤山あるんだから。」と細君は嫌がる子供を抱き戻し、「安男ちゃん、そのお芋はねえ、上げるから、早く持つてらつしやい。」と顎で示すと、安男は抱へた芋を持つて、素早く自分の部屋へ引つ込んだ。美代子はまだ後を逐はふとして、「うちの芋盗つちや、嫌やア。」と、尾を引きながら泣き叫んでゐた。

そこへ襖があいて、安男が今抱へて行つた馬鈴薯を前掛に載せて、キヌが現れた。

「美代子ちゃん、悪かつたわねえ、お返しするわ。」と言ひながら、キヌは美代子の足許に薯を置き、そこへべたりと坐つて、疊の上に額をつけた。

「奥さん、どうも申譯ありませんでした。」

「三河さん、謝らなくても、いいですよ。少しばかりのお芋ですからねえ。持つてつて食べて頂戴。」泣き止まぬ子供を横抱きにしながら、細君は頬を紅潮さしてゐた。

「奥さん、そんなこと出来ませんわ。お返ししますわ。ほんとに、わたしが悪うございました。」キヌは涙聲になつて、また額をつけた。

「三河さん、わたし今まで黙つてゐたんですけどねえ、何もかにも知つてゐたんですわ。おじやがに限らず、お醤油が減ることだつてねえ。でもねえ、人を疑ふのはよくないことだと思つて、知らん顔してたんですよ。それを可哀さうに、安男ちゃんを手先に使つて、押入にしまつてあるものまで盗ませるなんて、大事な一人息子が、それぢやア、駄目になつてしまふぢやありませんか。」細君は怏へかねる様子で、ツケツケと言つ